

## 所員の自著紹介

### 『ロマン主義の詩と絵画—ブレイク、ワーズワス、ターナー、コンスタブル—』

岩崎 豊太郎著

英潮社 2002年9月25日 (239頁)

ターナーが風景画《ロンドン》に描いた19世紀初頭のロンドンの景観は、現在、高層建築物群によってほとんど見るができない。タウンスケープ変貌の問題は、京都や北京など、歴史を持ち再生のために巨大なエネルギーを活動させている大都市についても言えることである。童謡「ロンドン橋が落ちる」は、ロンドン橋が新たな橋梁工法で架け直された歴史を思い起こさせる。理想都市ロンドンはどのように実現されるのであろうか。

本書は、産業革命やフランス革命などの変革期に流行したピクチャレスクと崇高美を視座に置いて、自然観、想像力、都市幻想の視点から、ブレイク、ワーズワス、ターナー、コンスタブルという、4人のイギリス・ロマン主義の代表的芸術家たちの永遠の世界を瞥見すべく、これまでに発表した拙論を再編し、絵画・版画の図版28点と著者撮影の写真14点を載せて、一冊の本にまとめたものである。この企は私の力量の及ぶところではないが、イギリスでワーズワスとエコロジーをテーマとする書物が出版されているように、彼らの作品が今日の景観論、都市、エコロジーなどの諸問題を考える上で役立つことを私なりに説明したかったのである。

もともと執筆の動機となったのは、故佐野正巳先生と私とがそれぞれ日本文学とイギリス文学の観点から詩と絵画について研究を始めたことであった。先生が一昨年暮れに急逝されて本書をお見せできないのが残念である。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

### 『未完のマルクス』

的場 昭弘著

平凡社選書 217 2002年5月 (302頁)

本書は、マルクス死後のマルクス遺稿をめぐる物語である。エンゲルス、社会民主党、ソ連の遺稿をめぐる闘争と、社会主義のテキストとしての編集過程を抉り出すことによって、テキストの政治性を暴く。マルクスのテキストが社会主義の聖書となったことによって起ったさまざまな事件は、20世紀最大の悲劇かもしれない。真のマルクスを求めるといふ闘争が、人々を翻弄し、勝手な解釈と自己正当化を作りだしていった姿は人間の性のおぞましさかもしれない。

とはいえ、リャザノフ、マイヤー、リュベルなどの果たした役割、『ドイツ・イデオロギー』、『経済学・哲学草稿』などの出版、資本主義の暴挙への抵抗勢力としてのマルクス主義にテキストが果たした役割などを過小評価するわけにはいかない。テキストの完全な復刻は不可能だとしても、せめてマルクスが残したかたである形での遺稿集の完成は可能であろう。政治権力の魔の手から離れた現在、その実現の可能性は大である。しかし、政治権力の魔の手が消えるとともに、その魅力と関心が世間から失ってしまったことは、まさに歴史の皮肉と言わざるを得ない。21世紀のわれわれが知の遺産をどう受け継ぐかは、マルクスの遺稿だけの問題に限られるのではない。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆